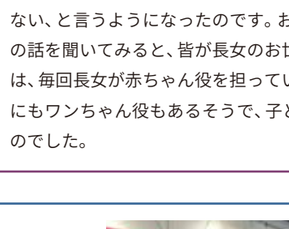
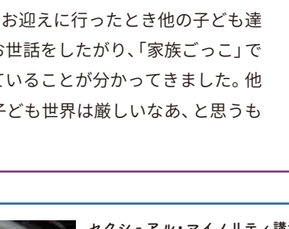
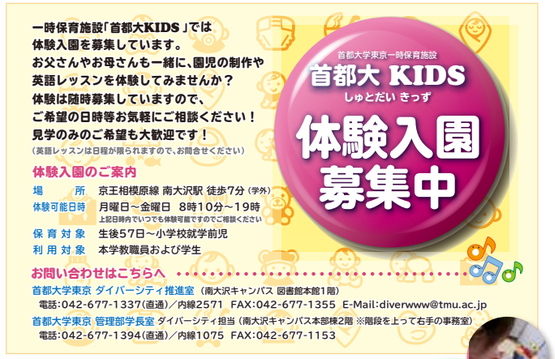
首都大学東京一時保育施設「首都大KIDS」

南大沢キャンパスには、首都大学東京一時保育施設「首都大KIDS」の子どもたちが外遊びに来ることがあります。10月にはハロウィンにちなんで、子どもたちが仮装をしてやって来ました。また、11月は勤労感謝の日にちなんで、学長室とダイバーシティ推進室の職員に手作りのプレゼントを渡しに来てくれました。秋晴れのさわやかな空の下、やってきた子どもたちと首都大KIDSの保育士の先生方、首都大の職員が一緒になって、笑顔で写真に納まりました。

首都大KIDSでは、この他にも外国人講師による英語レッスンや季節の行事など、多様なプログラムで楽しく毎日が過ごせるよう、先生方が工夫をこらしています。子どもたちが楽しく過ごしている様子が見える「園だより」も、ダイバーシティ推進室のWebサイトからぜひご覧ください。（藤山）







首都大学東京の一時保育施設「首都大KIDS」では、体験入園を随時行っています。実際の保育のようすを見てみませんか？ お問い合わせ、お申し込みはダイバーシティ推進室、または学長室までお願いします。

＊「首都大KIDS」のご利用にあたっては、事前登録が必要となります。
詳細はダイバーシティ推進室のWebサイト / 首都大KIDSのページ
http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/child/index.html
をご確認いただくか、ダイバーシティ推進室までお問い合わせください。

ユニバーサルデザインへの取組み

障がい学生支援は、障がいのある人への個別の対応である「合理的配慮」と、あらゆる人を対象とした「基礎的環境整備（ユニバーサルデザイン含む）」を組み合わせながら進めていくことが重要だといわれます。本学では後期より、基礎的環境整備の一環として色弱の方が見分けやすい色に調整された、色覚チョークを用意しました。これは、昨年度の色弱をテーマにしたバリアフリー講習会にて紹介されたものですが、後日、参加者よりご提案を頂き実現したものでもあります。この間様々な取り組みを進めておりますが、合理的配慮、基礎的環境整備、ともにコミュニケーションが重要だと改めて実感しております。（横山）

コラム　ダイバーシティ推進室 特任研究員　横山家の育児

満3歳になった長女は、半年早く幼稚園に入園しました。外の社会に触れるようになり、家での遊びも変わりました。何かになりきる「ごっこ遊び」が増えたように思います。動物遊びもありますが、いつ頃からか、「家族ごっこをやろう」と言うようになりました。長女がお母さん役、妻や私が赤ちゃん役というのがお決まりのパターンです。

しばらくして長女の様子が少し変わりました。幼稚園に行きたくない、と言うようになったのです。お迎えに行ったとき他の子ども達の話を聞いてみると、皆が長女のお世話をしたがり、「家族ごっこ」では、毎回長女が赤ちゃん役を担っていることが分かってきました。他にもワンちゃん役もあるそうで、子ども世界は厳しいなあ、と思うものでした。

家でのお母さん役希望は、幼稚園での赤ちゃん役固定の裏返しなのだなあと感じました。それほど、ある役を固定させられることは、自尊心を奪うことなのでしょう。翻って私と妻の家庭内の役割も考えなければなりません。彼女が家庭の役を担ってくれているから、私は家庭の外に出られているわけです。役割を柔軟に変更でき、皆が家庭の役割を担える社会環境整備の必要性を痛感します。（横山）

編集後記

セクシュアル・マイノリティ講演会に合わせて、スポーツとセクシュアル・マイノリティ解説ポスターを作成したところ、みなさん熱心に見てくださいました。ダイバーシティ推進室にはアライのレインボーシールも置いてありますので、ぜひご活用ください。（兼子）

首都大学東京　ダイバーシティ推進室
〒192-0397東京都八王子市南大沢1-1　図書館本館1階
電話：042-677-1337（直通）／内線2571　FAX：042-677-1355
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/
発行日：2019年12月27日
編集・発行

セクシュアル・マイノリティ講演会2019

未来を拓くアスリートの言葉

今年度のセクシュアル・マイノリティ講演会は、サッカー選手の下山田志帆さんを講師に迎えて開催されました。下山田さんは、2019年2月に「プライドハウス東京」が作成したメッセージムービーにおいて、自身がセクシュアル・マイノリティの当事者であることをカミングアウトしました。このカミングアウトに対しては、想像以上にポジティブな反響があり、特に、今までかかわりのなかったアスリートとのつながりができたことは、大きな効果だったそうです。

下山田さんのお話しで特に興味深かったことのひとつは、女子サッカー界には「メンズ」という概念があるということでした。確立された概念ではありませんが、男性的な外見をしている人や同性を好きな女性のことを指す言葉として用いられているそうです。女子サッカー界には「メンズ」がいるという、選手たちの共通認識があるため、下山田さんにとってはサッカーの世界は居心地の良い場となっていたと言います。

大学卒業後、2年間プレーしたドイツでは、社会の中に同性愛者がいることが当たり前で、例えばチームと地域の人々が交流するパーティーに、チームメイトが同性パートナーを伴ってくることも珍しくなかったそうです。社会全体に他人のセクシュアリティを特別視しない雰囲気が感じられ、そんな環境がすごく生きやすいと感じたとのことです。

下山田さんが日本に帰国したのは、スポーツとLGBTの問題を発信したい、日本から発信する仲間を増やしたいという思いからだと言います。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを前に、スポーツとLGBTにかかわる問題に社会的な注目度が高まってはいるものの、スポーツとLGBTにかかわる問題を発信するスポーツ界の当事者は日本にはおらず、このままでは一時的な関心にとどまってしまうのではないかという危機感があり、自分が発信者になろうと考え、帰国を決意したということです。

日本に戻ってみると、やはりある種の生きづらさを感じていると言います。例えば、下山田さんはあまり好きではないピンク色のヘアバンドをスポンサーから提供されたため着用せざるを得なかったことなど、小さなことの積み重ねがLGBT当事者の生きづらさを生んでいると感じているとのことです。

こうした現状を踏まえ、下山田さんはアスリートが主体となって社会の課題を解決するために会社を立ち上げました。女性アスリートの周囲にある問題は、社会にある問題と密接な関係にあると考えられます。例えばサッカーでは、男女で待遇に大きな格差がありますが、この問題を考えるためには、サッカー界だけではなく、社会にある男女の格差に目を向けなければなりません。下山田さんは、アスリートと社会の人々がつながって社会課題の解決に取り組めるようにしたいと、今後の展望を語ってくれました。

参加者からは「大変身近に感じた。とてもポジティブな気持ちになれた。」「女子サッカー界やアスリートの世界での現状、またドイツと日本の比較など参考になるお話をたくさん聞くことができた。」「スポーツ界だからこその問題について初めて知る機会を得られると共に、それが実はスポーツ界以外の社会問題と共通しているということを知ることができてよかったです。」などの感想をいただきました。また、「下山田さんが、うそはつきたくない、というお考え・姿勢で、正確な表現をしようと努めていらっしゃる、その誠実さが心に残りました。」との感想もいただいたように、とても真摯な姿勢が参加者の皆さんに伝わる講演会となりました。（藤山）

Contents

1
セクシュアル・マイノリティ講演会2019「未来を拓くアスリートの言葉」下山田志帆氏

2
TOKYOみみカレッジ
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク「第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム」
寄稿「広まる視野」

3
手話講習会（中級）
ランチタイム手話（日野）
ランチタイムレクチャー「ダイバーシティって、なんだろう？」
「ダイバーシティとスポーツ」

4
首都大学東京一時保育施設「首都大KIDS」
ユニバーサルデザインへの取り組み
コラム「横山家の育児」

TOKYOみみカレッジ

はじめに

11月17日（日）、聴覚障がいをテーマにした総合イベント「TOKYO みみカレッジ」（東京都主催、NEC、本学共催）が開催されました。昨年度に引き続き、ダイバーシティ推進室が基調講演を担当しました。

大学と高校の取り組み

基調講演では、「大学と高校の連携による聴覚障がい学生支援」をテーマに、高校の立場から都立中央ろう学校進路担当の牛嶋文氏、大学の立場からダイバーシティ推進室の横山正見と聴覚障がい学生の山口翔大氏、支援スタッフ学生の竹田彩夏氏が報告しました。

牛嶋氏の所属する中央ろう学校では、大学訪問や大学生による進路相談会の開催、情報保障の体験等を行い、高校生のうちから大学進学後の生活をイメージできるように取り組んでいるといいます。その上で、大学の担当者とろう学校が信頼関係を構築できた事例では、聴覚障がい学生が充実した大学生活を送ることが出来ている、と指摘しました。横山は、本学の聴覚障がい学生支援の状況を紹介し大学としての支援制度の整備や学生との協力に加えて、出身校と連携しながら支援体制を構築する重要性を訴えました。山口氏は高校生の頃から大学生活の準備をしたことで、スムーズに大学生活に移行することが出来た、と話しました。竹田氏は、授業支援やサークル活動などで聴覚障がい学生と活動を共にすることにより視野が広がり、自身の研究活動に広がりが生まれている、と話しました。

多機関連携による支援活動

基調講演終了後には、音声認識技術を活用した製品を開発している企業の方、大学進学を考えている高校生など、様々な立場の方からお声掛けいただき、意見交換をすることが出来ました。本学が短期間にある程度の支援体制を構築できた背景には、出身校との連携がありました。今後とも聴覚障がい学生の生活の変化に合わせて、多様な機関と連携を取りながら支援活動を展開していく所存です。（横山）

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet）
第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

はじめに

11月24日（日）に大阪大学で開催された第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト2019」に参加し、本学は「ニーズの変化に対応した支援活動の展開」というタイトルで発表しました。なお、当コンテストでは16の大学が発表しました。

ニーズの変化と対応例

本学は、毎年変化する支援ニーズとして、理系専門科目への対応、聴覚障がい学生の所属キャンパスの移動への対応を取り上げ、数式をパソコンで入力する際のポイントをまとめた数式対応表の活用例、インターネットを使用した遠隔支援の実践例を紹介しました。来場者からは、数式対応表への関心が高く、資料を希望する声が多数ありました。

その他、シンポジウムでは、「聴覚障がい学生のキャリア支援」、「専門的な授業内容に対応した手話通訳のあり方」、「聴覚障がい学生の『参加』について考える」など様々なテーマの議論を聴くことが出来ました。

今後の展開

全国の大学の取り組みを見聞きし、聴覚障がい学生支援も年々変化していることを実感しました。特に、音声認識技術の活用方法の模索、専門的な授業内容の手話通訳者の養成など、近年の潮流を知ることが出来ました。

参加した学生たちも、様々な大学の実践事例から本学の課題を改めて見直す機会になったようで、支援スタッフの養成方法やコーディネート方法などを検討するべきだという議論が進められております。そして1月には、参加できなかった学生向けに報告会の開催も検討しています。

以下、参加学生の感想です。「初参加で緊張しましたが、自分たちの取り組みをまとめることが出来ました」、「聴こえる人がマイノリティという状況を経験し、情報保障の大切さを考えることが出来ました」

このシンポジウムを経験して、それぞれが一皮むけたように思います。（横山）

「広まる視野」

私は支援スタッフ活動を、ボランティアセンター内のチラシで知りました。活動に関わり、私は2つの「視野の広まり」を感じています。

一つ目は学問的な視野です。支援で、理系科目に何度か関わりました。当初は文系の自分にとって見慣れない数式や理論等に悪戦苦闘しました。しかし、数学の論理的思考は、私が専攻する法律学に通じるものがあるな、と感じました。授業支援に支援活動の意義はありますが、そこから派生し、新たな学問的な気付きが得られるというのも一つの意義なのではないか、と感じています。支援スタッフ一同、「正確で適切な情報を届けたい！」という想いで支援を行うからこそ、この気づきを得られたのかもしれません。

二つ目は障がいに対する見方です。日常で、障がいについて考える機会はあまりなく、遠いもののように感じていました。しかし、支援活動や講習会を通じ、障がいに対する理解が深まりました。今では、自然と街の段差やマークに目が行くようになりました。また、支援スタッフは学年・学部を越え様々な人が関わっています。そうした多様性が学生内で溢れている環境だからこそ、日常の活動でも学びが得られるのだと思います。

これまでの活動で得た「視野の広まり」をこれから、働いていく上で、生かしていきたいです！

障がい者支援スタッフ
都市教養学部 法学系 4年　印出井直希

手話講習会（中級）

前期の手話講習会初級コースに続き、後期は中級コース（21名受講）を開催しました。後期から受講する方も多数おり、中には留学生や今年度本学に開講されたプレミアムカレッジに所属する方も参加しました。

中級コースでは、日常会話レベルの手話の習得を目指し、手話の表現練習に加えて、手話を読み取る機会を増やしました。受講生は講師の手話を注視し、発言内容を一生懸命読み取る様子が見受けられました。

最終回のろう者との交流会では、手話の表現と読み取りを駆使して、会話に花が咲いておりました。毎年ご協力いただいている八王子市聴覚障害者協会の皆さまに感謝申し上げます。

以下、感想です。「講師の手話を読み取るのが難しかったけど丁寧に教えてくださってとても楽しかったです。」、「交流会がとても楽しかったです。これを目標に頑張れました。」（横山）

ランチタイム手話（日野）

11月から12月にかけて全3回の手話講習会「ランチタイム手話」を開催しました。講師は山口翔大氏（聴覚障がい学生）、横山正見（ダイバーシティ推進室特任研究員）が担当しました。

当講習会はフランクな形で手話を学ぶことを意図していたため、実際の状況を想定した会話文を多用しました。例えば、「聴覚障がい学生が窓口に支援機器を取りに来た際の対応」や「聴覚障がい学生が履修する授業の試験」などの場面を設定し、受講生には学生役と教職員役になりきって、アドリブも含めて手話で会話をしてもらいました。

次第に受講生も慣れて、習った手話にジェスチャーを加えて会話するようになり、和やかな雰囲気の講習会となりました。受講生からは「窓口対応で早速使いたい」など感想が寄せられました。

日野キャンパスでの取り組みも進めていきたいと思います。（横山）

ランチタイムレクチャー「ダイバーシティってなんだろう？」

ダイバーシティ推進室の取り組みや、障がい、文化的多様性、セクシュアル・マイノリティ、男女共同参画など、ダイバーシティにかかわる社会的な課題に対する理解を深めることを目的として開催しているランチタイムレクチャー。2019年度 後期は、「ダイバーシティとスポーツ」「ダイバーシティな首都大学東京をつくるために」の二つのテーマに焦点を当てて開催しました。

前半は、2020オリンピック・パラリンピック東京大会を控え、多様な視点からスポーツを考えるきっかけになることを目指し、「ダイバーシティとスポーツ」をテーマとしました。第3回では、本学のボランティアセンターで学生コーディネーターを務めている学生が講師となり、スポーツボランティアの実際について、体験を踏まえながら話してくれました。

後半は、障がいのある構成員支援を中心に、首都大学東京のダイバーシティ推進に関連する部署の先生方にもご協力いただきながら、幅広い視点での議論を行いました。PEPNetポスター発表検討、およびPEPNet参加報告の回では、障がいのある構成員支援スタッフの学生が発表を行いました。また、前期に引き続き、学生相談室の駒屋准教授、国際センターの嶋内准教授にご協力いただき、駒屋准教授には発達障がいについて、嶋内准教授には本学の国際副専攻コースについて、それぞれ専門的な立場からのお話をいただきました。

今回は、今年度から開設したプレミアムカレッジの受講生も参加してくれました。首都大学東京のダイバーシティをさらに進めるためには、多くの方の関心と協力が不可欠です。今後も、さまざまな人がダイバーシティに触れる機会を作っていきたいと思います。（藤山）

＊各回テーマ

ダイバーシティとスポーツ
～2020オリンピック・パラリンピック東京大会に向けて～

第１回　スポーツと文化的多様性
第２回　メディアとスポーツとジェンダーと
第３回　スポーツボランティアという関わり方
第４回　パラスポーツとダイバーシティ
第５回　スポーツとセクシュアル・マイノリティ

ダイバーシティな首都大学東京をつくるために

第１回　PEPNetポスター発表検討
第２回　PEPNet参加報告
第３回　学生相談室の視点から
第４回　文化的多様性の視点から
第５回　障がいのある構成員支援の視点から

ダイバーシティとスポーツ
～スポーツとセクシュアル・マイノリティ解説ポスターを作成しました～

2020オリンピック・パラリンピック東京大会を間近に控え、スポーツとセクシュアル・マイノリティに関する課題への注目が高まっています。

そこで、ダイバーシティ推進室では、スポーツとセクシュアル・マイノリティに関する諸問題を解説するポスターを作成しました。ポスターは6枚一組で、セクシュアル・マイノリティの基礎知識をはじめ、スポーツとセクシュアル・マイノリティをめぐる課題や世界的な動向、日本スポーツ協会スポーツ医科学専門委員会による調査結果などを紹介しています。

このポスターは、必要に応じて貸し出しも行っています。授業やゼミ、サークル活動など、さまざまな場面でご活用ください。

また、ポスターの解説が必要な場合は、ダイバーシティ推進室の担当者にご相談ください。詳しくは、ダイバーシティ推進室へお問い合わせください。（藤山）